

<牧師室から>

感染リスク回避のためには窓の開放、熱中症リスク回避のためには冷房機能の確保…双方を両立させることの難しさから、後述報告欄にもありますように、会堂での礼拝諸集会休止を9/13まで延長することといたしました。再会を首を長くして待ってくださっている皆様に、主の慰め、命の潤いが豊かにありますようひたすら祈ります。そして執事会として新たな礼拝形式の可能性、試行錯誤に努めていますので、主の導きを共にお祈りしていただきたく、何卒よろしくお祈り申し上げます。

残暑のなか、引き続き意図的に水を飲むようにしています。コロナ対策として外出時にはマスクを外せない今、熱中症対策としては例年以上に水に頼っています。世界中で新型コロナウイルスのワクチン開発が進んではいます。けれども新型コロナがワクチンで消える可能性は低く、イギリスでは複数の専門家が、この先何年、または何十年にもわたってこのウイルスと共存していくことになるかと訴えているそうです。そしてある医療関係者によれば、インフルエンザ以上に変異が早いと予想されているそうです。だとしたらワクチンができても、すぐに次のワクチンを作らなければ間に合わないことになります。まるでイタチごっこです。これから夏場には、少し飲みすぎたかな、と思うくらいに水を飲むことを習慣化させていくぐらいで、ちょうど良いのかも知れません。

わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、渇くことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。(ヨハ4:14)

イエス様は、永遠の命を水、潤いにたとえていらっしゃいますが、この夏は内面の潤いはもちろんのこと、今まで以上に喉の潤い、身体の潤いにも気をつけていきましょう。

<在宅礼拝にあたって>

できる限り日曜 11:00~12:00 に下記の在宅礼拝プログラムをご一緒しましょう。教会堂で共に礼拝を捧げていた時を思い起こし、励みにしていただきたいと思います。なお難しい方には時間の都合のつく折にささげてくださいることでけっこうです。

教会堂での礼拝の場合、御言葉や祈りは司会者のことば(声)を通して聞く、賛美歌は奏楽者のリードで会衆一同、歌うことによって捧げていますが、在宅の礼拝の場合は、以下を参考にして、夫々の工夫によってささげましょう。わからないことは、牧師にお尋ねください。

・「招詞」

招きのみ言葉です。

この礼拝に招かれていることを感謝し、聖書のみ言葉に聴きましょう。

・「聖書」

御言葉をゆっくり味わいましょう。音読するなどの方法もおすすめです。

・「感謝と献金の時」

献金は、感謝と献身の表しとして捧げられるものです。1週間の出来事を思い起こしての感謝と応答を祈りましょう。献金を直接さげることができないこの時には、封筒に入れるなどして、教会堂での礼拝が再開された折ご持参いただければ幸いです。

・「賛美」

歌詞を読んで味わうなどでも結構です。ユーチューブに収録されている賛美に声をそろえるなどの方法も考えられます。

・「メッセージ」

「メッセージ要旨」をお読みください。

・「祈祷」

メッセージから受けた恵みや、祈りの課題を含め示されたところを祈りましょう。

・「頌栄」

「ベネディクション」の賛美を通して主の祝福を心に受け、来主日に向けた新しい一週間を共に歩み出していきましょう。

・「祝祷」

お互いに主の祝福を祈り合い、また主の祝福が世界各地に満ちるよう共に祈りましょう。

<在宅礼拝プログラム>

- ・招 詞 詩篇46篇10節
- ・賛 美 新生讃美歌 626 番 「主はいのちを与えませり」
- ・感謝と献金の時
- ・主の祈り
- ・聖 書 出エジプト記12章21～28節 (口語訳旧約聖書 90 頁)
- ・メッセージ 「あなたがたの子どもたちが問うならば」
- ・祈 祷
- ・賛 美 新生讃美歌 73 番 「善き力に われ囲まれ」
- ・頌 栄 新生讃美歌 679 番 「ベネディクション」
- ・祝 祷

<メッセージ>

イエス様が十字架にお掛かりになる直前、弟子たちと共にした食事、いわゆる最後の晩餐は、ユダヤ教における過越の祭における会食でした。そして本日の聖書箇所には、過越の祭の歴史的意味が記されています。私たちは最後の晩餐、過越の祭における会食を主の晩餐式の歴史的ルーツとして見ることができますから、本日の聖書箇所を主の晩餐式の意味を解き明かす手掛かりとして読むことができます。

本日の聖書箇所に描かれている小羊の血は、宗教社会イスラエルに生きる人々にとっては生贄の文化、犠牲の文化が想起されたことでしょう。聖書教育 p.62 にはこうあります。“…羊からすれば迷惑な話ですが、動物の命は人間の命の身代わりになりうると当時信じられていました。小羊が屠畜され、その血を鴨居と二本の柱に塗るならば、主はその家を過ぎ越し初子を滅ぼさないというのです。…なお、その肉は家族全員で翌朝まで残さず食べます。食べきれない場合は(隣の家が貧しい場合もあったでしょう)、隣の家族と共に食べました。”子どもの頃、教会学校などでキリスト教はユダヤ教が大事にしている生贄や犠牲を廃した、だからキリスト教は他の命を傷つけたり、弱い命を苦しめたりしない宗教だと教えられたことがあります。それを聞いたとき誇らしく思った記憶があります。しかし世界史を振り返ればキリスト教はそこかしこの戦争で顔を出していますし、私自身、教会内で捧げもの(奉仕、献金)や学歴のある人に敬意が払われ、返す刀でそのような持ち合わせの無い人が肩身を狭くさせられている場面を目の当たりにもしてきました。生贄や犠牲を廃した歴史的決断は、キリストの言葉として、現代のキリスト教会の中に、また主の晩餐式の中にどのように生きているのか、今も問われて良いのかも知れません。

犠牲として流された小羊の血は、神が救い主であるしるしであり、滅びが過ぎ越していくしるしとされました。(23節) このような理解は福音書にも反映されています。

その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。(ヨハネ 1:29)

一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである」。また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。(マタイ 26:26~28)

初代教会は十字架で流されたイエス様の血を、滅びが過ぎ越していくしるしとして受けとめました。主の食卓で分かち合われる杯に、罪のゆるしを見ました。コロナ感染が始まってから、“自粛警察”などという言葉が浮上してきました。衝動的な正義感にもとづく誹謗中傷が顕著になり始めた現代社会の向こう側には、どこか滅びの影におびえ、責任の所在を特定、成敗して早くラクになりたいという衝動に囚われた世相があるように思います。私たちは多くの人が抱える良心の呵責や負い目、生きる不安などがもっと明日を生きる希望へ造り替えられていくような主の食卓のあり方、教会形成を祈り求め、探し、たたいていっても良いのではないのでしょうか。

かつてイスラエルの民は、後から来る者たちに、胸を張って神の食卓について説明をしていました。(26~27節) 私たちも主の食卓について、共に考え、多くの人たちを招いていけるよう取り組んでいきましょう。

<祈りの課題>

- ・全世界で新型コロナウイルスの感染が拡大しています。脅威にさらされ困難の中にある方々のために、また治療にあたっている医療機関の方々のために、予防法や治療法が示されますように。
- ・この度の九州、東北を中心とした集中豪雨により被災された方々を覚え、お祈りください。また、速やかな復旧を願って働かれている皆さんのために。
- ・東日本大震災、熊本地震、今年の台風15号・19号、その後の大雨等によって被災され、痛み、悲しみの中にある方々を覚えて。また震災支援の働きに仕えている連盟、諸教会、伝道所を覚えて主のお支えがありますように。
- ・会堂での礼拝再開の道が開かれますように。また在宅礼拝期間中もお互いに祈りで支え合ってくださいように。

皆さんで祈り合いたい情報、今を生きる思いなどありましたら、是非お寄せください。ご連絡をお待ちしています。

<報告>

8月末まで会堂での礼拝、諸集会の休止を予定していましたが、残暑の熱中症リスクで、換気(窓開放)など三密回避の確保も難しいため、休止期間を9月13日まで延長します。

今後、状況によって期間の変更、または礼拝形式の再検討など、適宜お知らせします。

2020年8月18日 天の御国に召された木村敏子さんのご葬儀は8月22日(土)、ご家族葬にて執り行われました。木村敏子さんを偲び、ご家族の皆さまに主の豊かなお慰めがありますように、ともにお祈りいたしましょう。

木村敏子さんご葬儀でのメッセージ

讃美歌 新生讃美歌437「歌いつつ歩まん」

聖書 コリント人への第一の手紙13章1～13節

先ほど、皆様とご一緒に歌った、歌いつつ歩まん…これは敏子さんの愛唱讃美歌の一つです。歌いつつ歩まん…このご葬儀のために、敏子さんの夫である彰さんがご用意くださった故人略歴を拝見するとき、敏子さんが歌いつつ歩むその歩みには、多くの愛が注がれていたことがわかります。国境を越えて共に歩んでくださったご家族、国境の向こうで支えてくれた同志、イエス様が愛してやまなかった幼子たちと向き合うために助け合った仲間たち、その働きを引き継いでくれた協力者たち…まさに、晩年に至るまで多くの先生方と畏友とに囲まれて、賛美に満ちた敏子さんのご生涯は完成されていたのでしょうか。

先ほどお読みした聖書の言葉を借りるなら、すべてを忍んでくれた方々、すべてを信じてくれた方々、すべてを望んでくれた方々、すべてを耐えてくれた方々によって、敏子さんの賛美は完成されていたのでしょうか。まさに永遠にして最大なるものは愛です。そのことを敏子さんのご生涯は豊かに証ししてくれているのではないのでしょうか。かつて木村さんご一家が渡米された際、讃美歌はすでにロックやポップスにまで広まっていたかも知れません。その中の一つに、Growing up to be a childという曲があります。幼子に向かって成長する、という意味です。大人に向かって成長するものではありません。幼子に向かって、です。先の聖書箇所にはこうあります。“愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。”やがて人はこの地上で語った言葉から解放され、蓄えた知識から解放され、すべての業績から解放されます。それは幼子に戻るため、いや、イエス様が愛してやまない幼子に向かって成長していくためでしょう。かつて敏子さんが、命の主キリストの恵みに満たされた際、その心に輝いていた聖書の言葉をご紹介します。

20 このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、

21 そして言った、「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」。

これは旧約聖書ヨブ記1章20～21節の言葉です。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな…死は終わりではありません。死は、キリスト・イエスの十字架と復活によって、私たちが永遠の神の幼子とされるためのファンファーレです。この世において合格や不合格、比較優劣を生んでしまう雄弁さ、知識、業績のすべてはすたれ、滅ぼされます。そして“神があなたをどれほど愛してくださったか、また愛して下さることか”、ただただ、それだけがすべてになる。そういう世界が大きく扉を開けて待っている。この世において人が業績に囚われてしまうのも、神の愛をまだまだおぼろげにしか知っていないからです。しかし、やがて顔と顔を合わせてみるように、私たちは神の愛に満たされます。自分は生きて

いるわけではなく、生かされている。神さまのおかげで、隣人のおかげで。そういう感謝、喜び、賛美に満ちた世界の一人とされます。私たちは今日、このご葬儀において、永遠の神の幼子とされる明日を、共に待ち望むよう、招かれています。幼子を愛したキリストの慈しみを共に賛美いたしましょう。

(メッセージ後、「いつくしみ深き」を賛美)